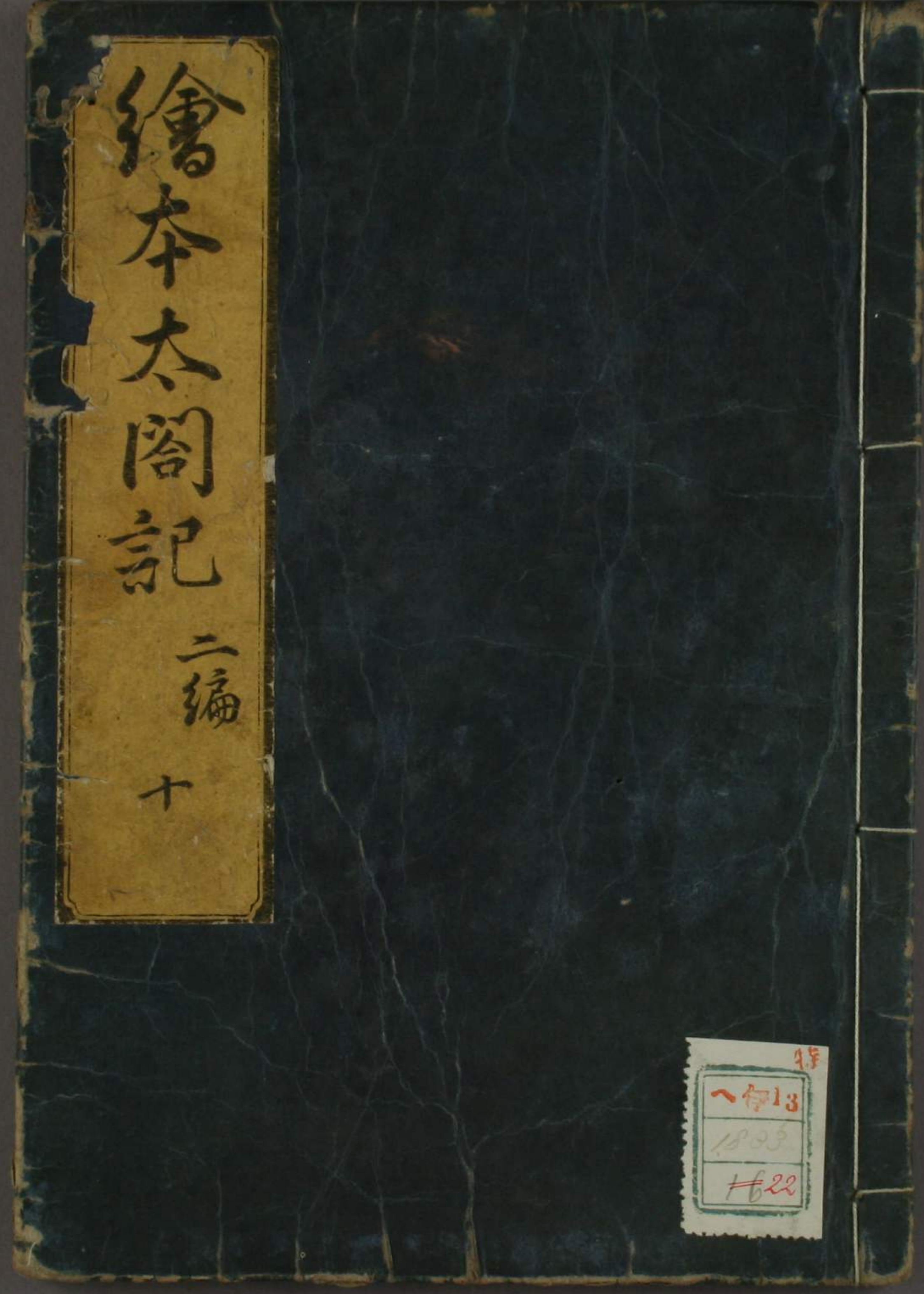






繪本古図記二篇卷之十

目録

秀吉再播磨出陣

別不長治叛信長

秀吉圍三木城

秀吉攻落野口城



加茂喜秋素性

中國勢圖上月城

光秀乃侮執拒上月後活

熊見川合戦

繪本左圖記二篇卷之十

秀吉播列出陳

爰に播列三本の城を別不小三郎長治曰小八郎治定等其先村と
 天竺の流しとて赤松入る意が孫教範の末裔之足利將軍義詮より
 代々東播八郎の領として其武名中國より小三郎長治若年なるふ
 ように叙別不山城守を相月孫右衛門重棟とす後見て長治とす
 三々が笑相を棟不和りて才を棟は信長に心を寄る笑相は毛
 利家の力を合せ自を計るにや門く去年秀吉下向の時も笑
 相仍て信長は帰休の多し故に秀吉を欺き討んと云とされど秀吉
 披露入國已後行時ゆゆの心わく國人を懐け百姓を驚嘆し後
 月能くいて東播悉く切ちて人故茶の境よりて河田まで



討所一にも名成得し事おもこれより密に心を通し遠近其威
 威に服し後々保固をうたへば賀相つて思ふも亦まゝを思ふは
 ど案に抄いて山城守再謀計を乞ひし使者を以て信長へ申付
 利家も討九死とせし令に服する者の附節より目代の勇士を下向
 るにわたりて某等案用先陣して中國討入るる有言よりこれに
 信長も此時を多ううとて羽柴統元守を中國の探頭と補せ
 られ再振興し給ふ秀吉面図より余り速軍兵を催し三月四日
 前途陣押の勢に先一番に旗二番は鉄炮三番は弓にぞん
 長柄槍又番に切具足各二列に列し其前後騎馬の兵士必しと降ふ
 次は兵鼓次軍監次は系智の馬次は秀吉の兵具次は隠次は小印次は
 歩卒叔太の在陣は秀吉其日の出まに緋威遣は秋形打る用と

石田佐吉三威も持せ信長より拜領の不勅國の石刀を寄し村
 雨と号けし馬を騰り前後左右に加後後陣に切尾勝頼は備
 坂等城始より万夫不敵の勇士これを守護ておせし次は宿老次は
 役番二十八人次は外候三十六人其跡は騎馬歩卒打より一万余人
 少しとて竹中守兵衛尉重治小石守勢として其勢一万余人
 整として討より熱軍二万余人其勢整として人目を驚かし
 む激は希ふの見物此時信長も御馬よりおる石連給ひて途より
 出く刀を遠く給ふ秀吉が軍兵盛に馬強く威風凛々するまゝと
 御流し松井友閑武井夕庵より向ひの給ひるに秀吉が軍列勇ある
 らば中國征伐成就とすべきの疑ひみづからとて其の給ひるるを
 後々大に美ひ給ふ友閑夕庵其意を告げし君臣に秀吉の軍

列を笑ひ給ふと尋ねてせられ信長へやと秀吉が軍列を笑ふ
つゝは彼猿冠者若即氏もさ下郎なりしに我ははて二十余年
戦場に向ふ毎に魁殿を心かけ勲功を積む名を争ひて終に中國の探
頭となり今日の武陣實に勇い後形勢はわれ大なる武と思ひ付小猿と
思ひ首を思ひ合て今のおど笑ひなりと宣ひしれ友田々唐等く
改をさけ令のぞく希代の勇い思ひ合の謀りふては是等若の徳福
はるくも形勢出でる者なりとやとし信長も氣さうおどし
ぬく安土へ帰城ありたり

別不長治致信長

同七日羽柴筑前守秀吉姫路へ戻し小寺官兵衛及び中國の諸士
を招き中國退治の計略をぬき此時別不三郎長治が名代となり

後見山城守賀相家老三宅肥前守治忠席よりなり友人等々
進み出頻りに毛利の武威を語り廉怒は中國へ向ひ給ふ勇いき
大なるを引出しは中後くと毛利方の校場を攻め能く虚実を伺ひ
て後大に軍を臨討給ふのなりと一奉に中國を定むと強り
毛利の威をあらはし秀吉の軍を思ひめんとして其中に謀をひき秀
吉討んと計りの之をあらはし秀吉大に怒り我は是下迄の見と
異に抑ふ武門は名は難さんと思ふの敵の別を思ひて征伐を急
らんと彼を討てん我討て我活彼と斬て何条ののめづるや
後敵の威を語り味方の英意は決しむるなりと若く彼罵り
たり別不長治等々き詞もなりとさうく三本をぬきたりと
みよる山城守賀相家老三宅肥前守治忠席よりなり友人等々

別不
長治
信長
教



真景言一掃卷十

援兵を乞て秀吉と援討んと其計倭とまぐ之長治が弟小八郎
 治定今年十七歳未冠なりとて軍要なきにき若者之けき
 を進めて中より兵に非違をさるる先とる時人を征とふ利あり
 とて既味方にくれとて企ゆる秀吉が弟勝るる先此方を
 押寄敵の不意を討て必秀吉が首とるる若討伐とも十の
 勝利を得とてとて去る相秀吉が弟に恐れふやとに心せ
 ば一族幕下のま一城のま其居城は楠籠山城の後方に在りて
 先志多の城より楠籠山城の勢をみて龍城といふ非吉の城より
 非吉民部が陣しれり勢をみて楠籠山城外より砂の城に堀原平三
 兵衛時に城に長井に即た津門河川の城より河川弾正波志多の城
 より長井守等と守勢を小三郎長治とて改て勇士とて別所小

八郎治定は長治の進交約日山城守が相其外中村を搦取部後
 長谷川非吉大村上原魚住飯尾辰回がまゐる三本の城は群集し
 軍勢都合七より百余騎兵糧玉山のまゝに陣し既旗を掲げり
 三本の城中は籠りし士は後援を望み固く守る者あり今度長治
 一家謀叛のり自滅を招く様と援て誅をさるるむれも長治
 が相曾て承けしに女提籠城し運を天に任せ討死せむと覚悟
 せしが男子は今年八歳とある生得徳明藤利とて約束せしき童
 とは龍を伝へ傳きさるる今度の籠城とて味方の勝利を求
 るべく候はし見を殺しも候はしとて武彦小児をいさるる小寺官清
 正と改て許しめし我心作を物語りけり三本の城より援け討死
 を遂ぐるにまに候を告げし後援の家名が相續るにや

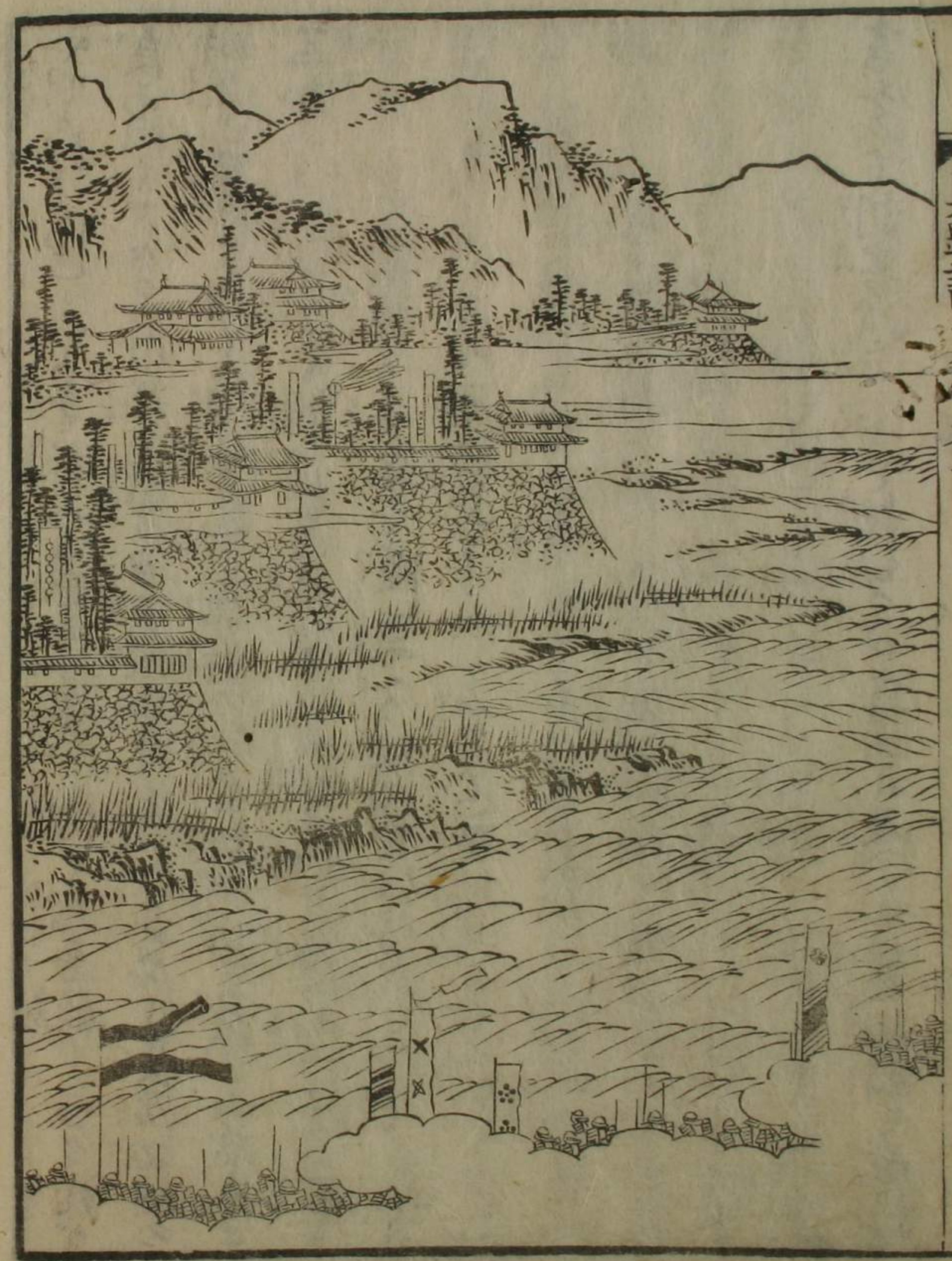
然るに永くありて何やと云ひいんと余はもつて頼とけは
官兵清元某基國と云きまゝに心易く落す不肖に
ども其守之最後の事再教せしむ心苦しく頼とそ頼も
まづ其由れ基國派をるじ悉く謝て退きしけ小児生長して
後其兵清基次と名乗智謀勇畧群々秀て英名海内を鳴
響る

秀吉圖二本城

去程羽柴筑前守秀吉別不長治が謀叛の由は別不孫
右衛門を棟居て其故と同一重棟謹で長治ある企みする其
曾て死ねば中長秀吉怒て汝長治が叔父山城守某相が身な
らばや跡き一族門系とて復集り龍城せしめ汝も死ねておらん

や明らけしに「あゝを棟大ぬ恐る迷惑」皆く涙を流しあつたが
良あつちやうの所疑い蒙るや其涙さき次方之去るが長治初推の
時足山城守と曰く後見とぬ郡村の仕並頼仍いよ我と山城守と
不和やての全く調つた其に軍義昭云河上洛の期に久しと
捨て某一人馳参り寸忠を盡し「まう信長云に陸軍」此れこれ
きり足下よくあはれ不之なるを以て兄賀相某を忌むこと
るまればを思ひいふも病斗もあつてせしめけり頼と頼思ひ
物なりと述ふ某が首を刎て河心を渡らせしに「御眼は」と云ふ秀吉
笑て我何ぞ汝を疑ふや先きに獻るもの汝試みよ長治云青龍を
を送り降参し勅むと云ふに「まにわい」を棟居者三本の城を
書を以て利害を指示降参勅むるを再三よ及ぶも賀相敢て承け

秀吉
三本の
城を
囲む



真景
三本
城

せし秀吉これより三月廿九日二万余騎の軍勢を引降し三本城
 近く押寄違ふ龍城の形勢を伺ひしに此城元来大河を前は
 臨山を後み要害五双の名城なりふ別不田永世の門禁甚き我が
 兵士等みな余人必死と誓ひ龍城に加之津若澁川志賀多時
 波志若の城に兵士殺多龍居居く敵三本城を包圍まは方より
 喋り合せ援で討んと結構し秀吉若若の城より退く
 易に妻落し難きを計知り西に軍を返り自身殿して退く
 三本城城中其外の城より援を乞ふと追討んと候し多し
 秀吉大軍に押寄一戦して退く即日引退く必と決き計略
 ならん追討せんとて敵の計策に落入不意をみるのみづから兵
 を制して敵て出で家みゆい秀吉事なり姫治と引退きお士

に向いてヤタ三本城要害堅固うて一討は妻落し多し
 強て戦ふ味方の援を乞ふに我一戦もなして退きて三本の
 城兵も網羅の急龍中の要害を我に候し龍城せいの
 うて出で戦ふ多し勇きも不冷味方兵士の援せざるや先
 時に澁川かんどの附城を攻落し其後三本の城中英奇塞け退
 屈してめん時敵は妻付悩むに忽ち一討は功をみるに先時に
 を攻援んと其用を我にせられんは

秀吉妻落龍城

秀吉小寺官兵清と計て三本の城を攻めし書寫山本陣と接
 して是より即討は熱勢を引て書寫の山登山一山の僧徒と
 してはかくまきに隠れしものき同より引んと周章發ぐ

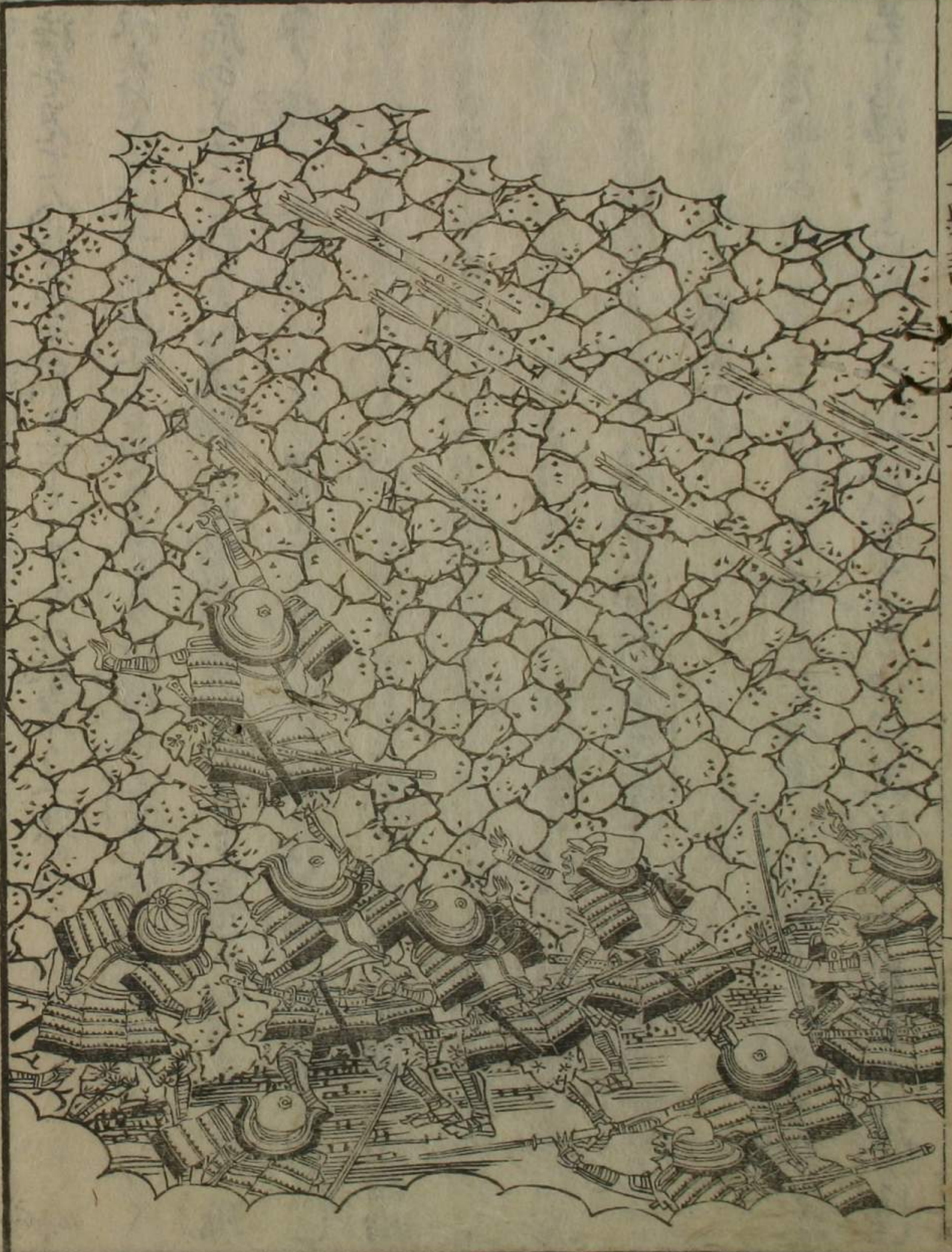


ひさう
秀吉
の
陣
を
美
落
に

の大方なり。此秀長俊者を以て僧坊やせしむるに羽此本筑前守由
 國平定せん。此山は本陣を居んとし、此山よりともども寺院を以て
 僧徒を狼藉する。曾ては平日のおどく安居に」として黄令若千
 布施する。衆徒にせめて心を安んじ、強勅を靜むるを乃若由山に本陣
 を築く。構へて月三日、万余騎を引率し、俄に此山の城に押寄せ、方を
 囲み、固をゆるがせ、鉄炮を放ち、短兵急に進む。此の城は長きに即ち南門
 兼てより思ひ込けしむるに、此の城は不勢なり。此の城はあまた大軍
 勵し、防ぎ難し。此の城は中より騎よき、ぬ不勢なり。此の城はあまた大軍
 よ防戦する。いづれもききて、刀をふる。寄るに、騎あまたの勇兵ども、村
 ども斬る。此の城は十に八、騎いづれと、城跡よりけしむるに、此の城は
 衆入んとし、秀長が良策に、加藤孫一喜秋とて、大別の若者ありけ

陣を見て、人み先を破れしと一さん、近きう一番のついで、我なるそし、陣
 に、此の味方の兵士が、肩より、けしむるに、上り、足で踏む。此の城は
 肩の上を、いづれ、加藤孫一、此の城の一番のついでと、大音なり。此の城は
 なく、城を、衆破る。此の城を見て、秀長の、大軍、一月、固く、此の城は
 と、秀長の、此の城、兵を、破れしと、必死に、めて、戦へども、終に、此の城は
 を、衆破る。此の城、引入る。此の城、龍城、いづれ、大なる、長きに、即ち
 南門、人、衆を、出さず、降参る。乃若、此の城、いづれ、攻め、退き、俊者、を、
 て、即ち、南門、を、おさる。此の城、南門、破て、秀長の、陣に、来て、衆を、乞
 加藤、喜秋、素生

今度、此の城、一番、衆破れし。此の城、勇士、加藤、孫一、喜秋、が、素性を、見せしむ
 是も、此の城、いづれ、利仁、の、軍、衆、名を、此の城、流して、破る。此の城、の、衆、あり



が十二歳にて父母よりおとこに及ぶ来て長濱の馬備の家に暮れりしが
生得物と稱くゆゑ沈勇にして智面よりみず大膽不敵の者
なりある武を好む馬術を嗜み師にうけりて頗其好むまじり十
六歳の附業のゆゑに吳國一強く此附信長と来波卓に居たりけ
るが幕下の壮士城郭に出く馬を賣るふ其中に玄奴の荒馬ありは強
くして衆者は驚くもまじりいかに力を盡しぬまじり悉く刻落され悵
として泳ぎ居る彼孫一奴にあらんば衆衆より見物とあつたがまじり
下なる衆人よりとて叩て大きに笑ふ侍ども衆を換ひ孫一を
引捕り此小童の鞍味も知るや人我く落馬せるは見て笑ふそ
奇怪なり此荒馬は肋骨を踏おけて思ひあつせんといふ勢を衆
一を宙よりあげ彼馬は衆人より見物と信長との馬よりに加へ權兵

備とふ者ありとて見くわけて押とめやうる此童諸士の馬術を誂
諳するに悉く曲のなりども去民といひまじり年々長せざる童
るればまじりて家へ孫自れ馬を踏殺されぬ諸士の妙法あり
はうとてのまじり思ふあり一向は免させ給ふとてうて流るる若
侍どもい言ふと実にもとや思ひ人引捕るる孫一を放ちまじり
惡口と後に見せりやうとて奉とて孫一が頭を付孫一太にいへる
我推してぬき出されし頭をおるこつどもまじりわたり此報をぬき
まじり衆の打擲を夢とて安んず候りては速に馬術の拙きあらぬ候
は笑ひに我誤りいふあり流るると已に衆を勵む心なく候り人々
お叩い何のぞや已に候りて思ひあつたがまじりと白眼まじりて
ぬんといふ若侍どもみじり怒り言語の妙の思辨する討捨するを刀



加茂喜秋
素性



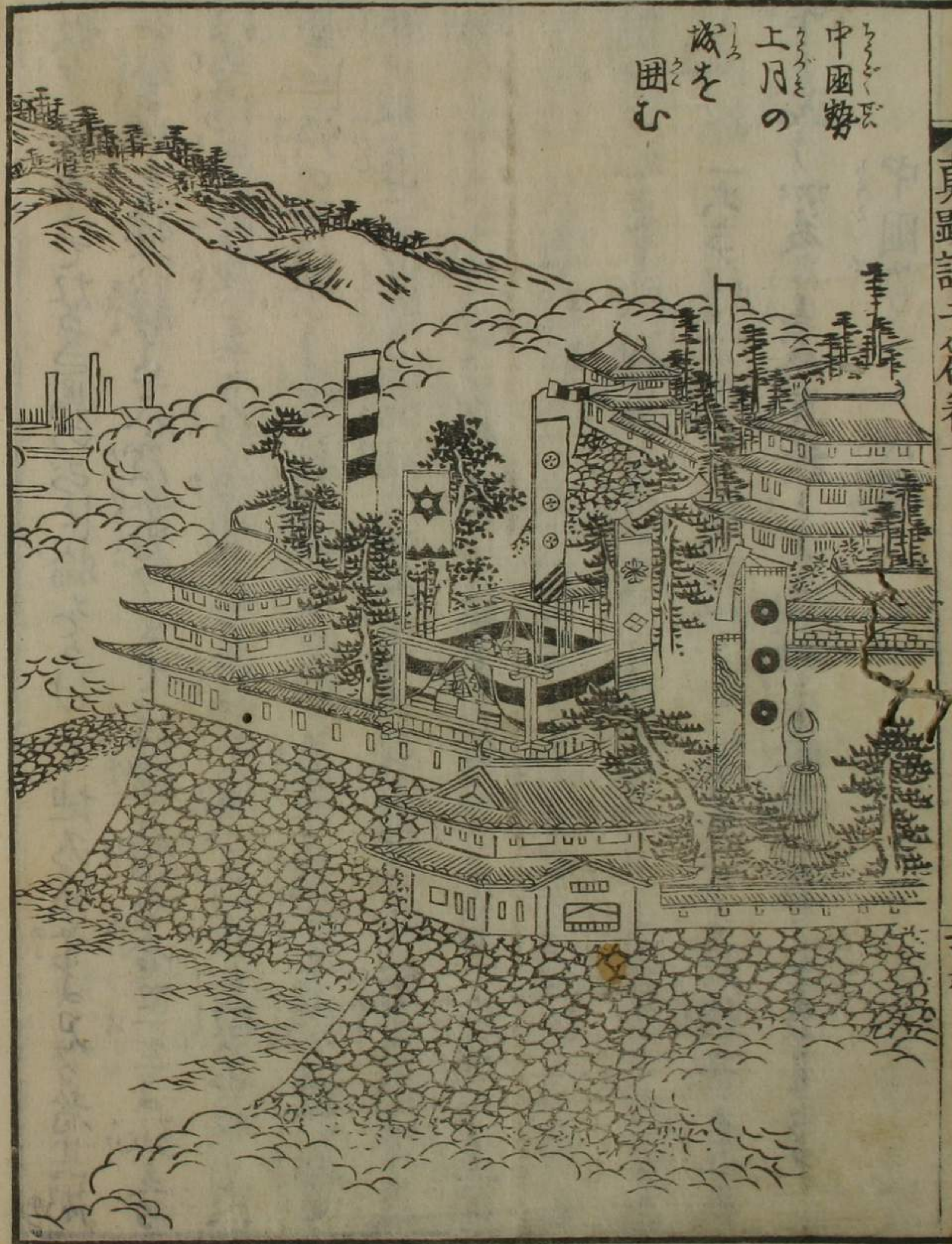
よもをうけたりより加後指兵衛押金とて嘆て中々うい己要き童
 武才に討と云せるい令をうけの曲者うよく此場を逃去其後免
 一なる再び河原出とい某なる討とるうとあるを威怒うる孫一
 又と怒うるう我元来馬と乗ゆを好む我いまだ菰束熟かり
 とつても各方に勝て先我を馬と乗ゆも乗得る時我い
 るお擲あやうい少も恨むるうは理不盡又恥をおき何を云言は
 てゆききとつ權兵衛を始めと數多の壯士をば何換け小兒
 出の者い何に先試馬と乗ゆ彼者馬術をうんと一日や合せ
 彼荒馬と乗ゆいせう一鞍をばとを別とて物とるいめく
 ぞ見へる扱彼馬に付の男に今と牽来るに眼ひうる息何く躍
 たりてい獲けきを孫一うもせばおきて付を放むにけ馬

敢て獲てたる馬のぶに論をうけく地乃瓜乗と見る者其術
 を驚歎と孫一靜と七八度乗ゆとて渚澄と鞭を合せ二三と近まる
 に馬場末の墮際までうけ流馬の糸足の蹄を搦てい一と駈めやうに
 牽ゆ作のふに乗り居て款々平生のおと並居る渚と膽をば
 惡に難言と君侍等は瓜団て屈服を加後權兵衛大きに驚きけ此
 只人あはれ誘いて宿而ゆる國素性瓜易う孫一の優は性氏
 を物語り指兵衛よく候い思ひうき汝と我とは性なれおは
 親族の別とかりば我汝を喜てるに武士はめく其名とせんいふ
 と同孫一大きに候び終に權兵衛が如に書育せられ後秀吉の臣
 下とあり加後馬女喜秋とく武功勇略双ぶ者こそなりうる



中國勢
上月の
城を
囲む

莫圖訓二卷



関西十余列の大守毛利右馬院照元三木の城後浩のくみ三月廿八日
七万余騎を引率先元子勝久山中麻之助等が籠りたる上月の城へ
押寄せ方を囲く妻三々城中元より思ひ返けたるうれば少も強は
矢石飛た本を抜け濃く防戦はるれあの大軍とてふも又も
近寄る能はぬ負死人殺容易城とてき体たう孫を毛利の勇
将吉川元海守元春也智恵き名おるれ諸軍に知て城を去るに
陣要害に於て休を密に遠攻めとてうりうり毛利籠城の大なる山
中麻之助古今無敵の勇將とて必死の防戦をなせば幸に落城せし
る東く後日教を經る内羽柴秀吉後浩城をば味方敵軍せ
んの疑いはとてわくこと下知を傳ふる先きの倉山の尾崎に後田勢
一万五千余騎陣をたれ其次に小川隆景三吉平賀が中

城後の勢二万八千余騎休をきて扱うつ其次上月山の林原より吉川
元春南条小勝等二万七千余騎陣を張都て熱陣の如くは芝をを
築柵送り木を結専ら後浩の勢を逐て我んとはまろふ書寫山は
は羽柴城を秀吉兼て三木の城と美んと計多ふ此のをば扱
上月の城を扱とんばと別所孫右衛門行中守兵衛あふ二万
七千余騎をよ三木の城を押し自を一万二千余の遣兵をよ上月の城
へ後向る倉山の原より五木の吹雲瓢箪の大馬印を押し立て軍威を示
陣をえる城中に元子勝久山中麻之助達より吹雲馬印をえり
秀吉自身後浩より向ひたりとてなり勇に倍々勇将十倍てふせ
ぎ我んとは戦ふ要る先陣後田重家が兵士等の去来此城の後を
よ向ひ附敵く秀吉の切崩され羽柴が各城をて兵卒悉く震ひ

ろ今も倉山の馬印をうて何となくききまとい羽柴が接兵ひひぞ
 等閑の我ひをば不覚と云ふなりと今も款のうり来るなり
 ちよ發炮よと狼狽發け陣これを作し何と云ふなりと
 上をよと發動と云ふなり川元春小川隆景陣馬を系也制し
 ぶ潮陣中ひねりつゝを固まる秀吉の武威恐怖するなり
 おし去るに羽柴秀吉尚表は陣中國勢の移勢と云ふなり
 害にきて陣と云ふなり松葉柵を繕ひ大軍長陣と云ふなり
 川の急流中と隔て小勢をなげりに向戦するなり河のこたみ
 陣を布あをて信長云に後進後退の勢を云ふなり其急なり毛利方の
 軍勢も秀吉小勢と云ふなり軍急進き大おかりに謀の合戦なり
 とて移陣と固めて敵を動かす三方の軍勢白眼合て目を送るなり

去程は秀吉のよおの役ひは安芸の城に居て安細言と云ふなり信
 長云らば加勢を出るなりと荒木村津守村を以令し播磨は下向せ
 り移る村を令承して播磨の勢万余騎を引率する倉山は前陣に秀
 吉大きにほび荒木と謀て先戦ひと始んと此時荒木村津守信長
 を恨み事とせ既と叛心とにせむとてとも来其るを破るなり
 陣ひ後退せしめども羽柴を助け合戦と云ふなり味方小勢を中
 國の大敵はうらんや移るなりとて敵を秀吉と和勢せし秀吉云
 心きてなる大おかりに村を以同心と縁際此者中國勢と心を合せ味方を
 討い勇く敵大なりとてよく好言を云ふなり透し其心の怒
 らざる計をばはれども後には別不黨の逆後めて勝級へつと云ふなり
 または毛利の大敵雲霞のおく集りてそは易者の對陣なり

に前後の別款小勢を以てあたるべしとてその合戦なる所たゞ味方の
援兵とて向ひ来りし村まのいかにせんと懐き結句加勢のふらぐれ
とあつたに危く秀吉の心算をたつたに益疾伸びるゝ心配をせし
うそにふり再びおを以て信長に加勢とて信長に龍川を二
蓋惟任日向守光秀侍丹波慶長武蔵赤松兵衛等以命二万五千餘又
月日自國を後援揚州表出陣と續て小島信雄柳井信孝柳井久
間右衛門尉信玄細川刑部が浦安を以て系亮稻葉右衛門進安後
守守輝谷兵庫次郎都合二万五千餘人下向し八月十日志
倉山より陣せし今秀吉の軍勢都合二万餘騎に及びしに中國勢
の七万余騎と對し多勢とて進んで敵を討て勝利を得んとする
がたに秀吉中國の探題とてけ合戦は勝利を得て進んで中國を平

治せば其功諸勇臣のよみて諸勢の清きなりとて其龍川惟
任仇之間を以て小田家の勇將悉く侮れを以て抱き急を付角に付け秀
吉が功を以て母に計ひしに援兵加勢の名を以て軍中々に和合せ
ば秀吉が力とて人者とする勢の勇士のとなりしに中國勢の秀吉の加
勢日毎にふり今大軍にめりけしに信長も出陣ぬらんといふ
月の城を棄てて軍勢を二にわかれ一は秀吉の勢に向ひ對陣
一は上月の城を棄てて軍勢を二にわかれ一は秀吉の勢に向ひ對陣
の来りしに秀吉の威を以て敵の心算をたつたに益疾伸びるゝ心配をせし
うそにふり再びおを以て信長に加勢とて信長に龍川を二
蓋惟任日向守光秀侍丹波慶長武蔵赤松兵衛等以命二万五千餘又
月日自國を後援揚州表出陣と續て小島信雄柳井信孝柳井久
間右衛門尉信玄細川刑部が浦安を以て系亮稻葉右衛門進安後
守守輝谷兵庫次郎都合二万五千餘人下向し八月十日志
倉山より陣せし今秀吉の軍勢都合二万餘騎に及びしに中國勢
の七万余騎と對し多勢とて進んで敵を討て勝利を得んとする
がたに秀吉中國の探題とてけ合戦は勝利を得て進んで中國を平



光秀
偏執
上月の後
拒む

真顯言二篇

光秀傳拒上月後浩

叔も秀吉上月城後浩に向ひたれども味方の諸將和せざりて救月の
 討陣一度も毛利家と不相うく却て川の附より城の圍を解るゝ心
 を若くは再役者を以て信長云の出馬を乞其口より秀吉君命を令し
 中國を征伐するんと意欲腹食を忘し合戦は心を苦め糸今より上
 るに及ぶるにこれなる毛利の勇將若川小八郎大軍を以て上月と表る
 る甚急之秀吉後浩に出陣しに先河加勢に下向るにこれ終ふ人ぐ
 云達老臣の歴るるに秀吉とき者の程に命を乞ふ方々なる
 此れは味方相せにて救月の同来一戦も及ぶに後より先陰を送るぬ
 かて上月落城し厄子一家悉く滅せざる願ふかきなり次
 いに河やわれ此より君自河出馬きて諸將孤下如合戦とひとふ

終る者なり秀吉先は敵を切崩し終肯細身にては度圍を解
 厄子一家を相せにせ強は厄子と後と助るにわに中國征伐の
 初めなり毛利の大軍と討陣るに敵の勢其大才を乞援ぐきう且に
 三本の城は籠りたる別不のま忽後援の便りを乞ひ英奇にけ
 るうにき敵討もいふはこれに中國討み平安定せんと只此一戦にあり
 とこそ思ひ侍るに急で河出馬相ひなると利派明白に言はれに
 信長云く河許容めを乞る軍配我るに河出馬は先まきと乃
 惣ふおじて中將信忠を下向せむ間秀吉と計とて定め合戦を
 初めんとて信忠卿は是角五郎左衛門と若派軍勢二万より援け
 へ下向りて書寫山より着し終ふにうぐ秀吉少し力を得て
 く上月表(出馬)はあひ諸將の力を司りせ終ふと進めなれと乞

より前に先秀信忠卿よりなほ強き秀吉中國の追討句を蒙り俄
と功を立んとて味方れ換を厭ひ五謀の合戦を立んとて抑三
本の城を籠りたる別不一家のいなき容易の敵より事次に東播
のまゝなり民の心を得て神吉河川波志吉等の城より一味の勇士捕籠
しを思ふべき大敵今若秀吉が強きのおとく上月表は合戦始りぬ
いふ三本の城より討て味方の後よせまうしけ時秀吉いふやうに戦ひ勝
ゆを得んや今別不一家の討ておとるい上月表の合戦なきがゆなり
秀吉い道をぬんと歎せ先上月表の師を信し三本の城を攻落し後
の患なき時と後くと中國を征伐せば味方死この出いなく金く大功と
まべきと上月城を二家へ換に似れども後よ小城一つを救ん
とて味方の大換を厭ひは秀吉が功を急ぐの誤りと若よりと

を繋いぬ此度の沖下知も先上月を引ぬやうに付られ替て信
長と沖出馬の儀など勢よくおとるが青洲制止めなぬとや入るに
未若多の信忠卿此河川理りいせせ強き秀吉が勅めを用いたま
は利へ後者を安きにせして信長の沖下向をも止し強ひるいそ派もな
きゆたへ併え元子一家の運傾き勝え幸盛がとぶるき時かりなりと
後よ表より催しなり

熊見川合戦

以い水五月廿日斗を暑焼がぶく西勢原を向んとて本陣を
陣を後し暑と凌ぎ居りたる此時倉山のす霞は傾く龍
川氏おが士率とも毎お山の林原から熊見川よりりて馬の足と冷
る孤中國勢伺ひ知て百余人俄に走り来りなるとと後炮を

熊見川
合戦



真田記二巻之三

十四



真田記二巻之三

十五

おろけ一文字と切てくれば龍川氏おどす率とも大きに移る馬ども
 をお捨す我先にと迎さるる中園勢のまほじとを困て我ふ
 にぞ氏おた系亮をを見て味方れ士卒討とるそ一万余人切て
 出さるる川小又川が陣中より秋原接漢守吉田肥後守完五郎
 兵衛河に刑部今田中勢二万余人殺出とるを敵て我ふにぞ又
 上方勢佐久間信盛龍川一苗安成内井一万余人氏家を討とほ
 と槍襖を代と懸波を揚て相戦ひ殆ど合戦とそなりにも元来
 中園勢地の理得より八方におさまる味方を助けあい進退近刻自
 中元は喰いと叫で戦ふにぞ上方勢勇まゐる又お保とも心くれ軍
 と下細を司るるおなれは川中園勢は押えられ林葉をばて敵
 走れをえんとて龍川守秀吉倉山の上と陣を布る荒本接漢

守村重(後者)をいさる計さる合戦始り味方難儀と相見(公)復
 某の勢をえて強く敵よりさるるに就ては敵お吉川小又川の両人
 宛て切て出(き)間下山より敵の陣所へ送落し切込なり此合戦味
 方の勝利なりはかまき物を得り移るるとせし是旗本の兵二万
 余人をまん九は彼(と)喰て切て掛る小秀吉が良等中村孫平治
 一氏共先と槍を入急敵兵七八騎馬より中園勢に中園勢も小
 治郎原田與三右衛門後炮の兵三百余人先に彼(秀吉)が旗本(と)ら
 くとお入るる秀吉が兵士槍張伏ておあ留し敵は居るなり
 彼中村孫平治只一人敵中へ突く入るお小治郎を一槍に突殺
 勢いよふて近よりこれに續て加藤福徳行切勝頼が旗尾浦
 坂糟谷平助が家我勢と切られ中園勢此陣をいさるる一度

又とて引りたりそいふに、隴川佐久間安友氏が母が安忽の
 多に於て勇を震て探合より、此時中國勢既又殺せんども、
 大なる川に守元表系配追ふ大音あて下後や兵も迹て中國
 の名に下るる馬を東西より頻て下知をば、これに板系橋津
 守日弥八郎は又治郎香川兵部を浦森服市郎左衛門に引んた
 津門尉を其勢二万余人徴應に如と勅くはと悉く下後て槍と
 膝のよと悉て息とをいひて居り、此より上方勢もたおさく、掛崩す
 る能ひて馬と扱く息終居より、は時小又川隆系若川元表の
 あお二日は切て出て戦ひ、二度い上方勢を切崩と、これより倉山
 の後頂は荒木村を二万余りの軍勢より、勅と陣と密めて扱へ、
 智意源き若川小又川我本陣を討せんを悉く散て、勅に合戦

び度又浪るる、これに縁引り、引られ、上方勢もを悉く軍勢と引上
 る、秀乃吉が旗本の勇士追討せん、とどよめたる、紙秀吉より、制しと、
 小又川若川紹忠のおより、今軍を治んと、もつる倉山の荒木が勢を
 悉く、め之殺して、引に、あ、此、殺しく追討せば、味方の大患あり、とて
 師をまど、も、引り、る、其中は、後藤市松、則、血、奇、壯、人の若者、
 しば、い、う、款を見、捨、る、ゆ、よ、と、は、ぶ、や、と、只、一人、小、縣、左、衛、門、進、え、は、が、引
 引、勢、と、退、付、て、さ、ん、ぐ、と、戦、ひ、る、え、は、が、即、等、末、石、弥、右、郎、と、う、若、後、藤
 と、槍、爪、合、せ、暫、く、又、(実、合、が、い、ん、ど、後、藤、が、勇、は、款、と、き、三、槍、に、突、殺、され
 後、藤、が、良、等、六、七、十、騎、馳、り、きて、馳、来、り、續、く、味、方、も、さ、く、久、い、な、く、さ、り、ぞ
 き、は、な、し、と、も、爪、を、く、引、く、せ、ば、い、れ、も、さ、ぬ、く、て、す、丁、計、退、き、る、ふ
 今、討、に、款、の、首、を、さ、り、ご、う、と、を、念、なり、と、又、近、出、え、の、不、に、来、り、た、れ、ば



其
二



其
二

其
二

二丁計向の方又南条小路勢三々計使人を以て陣を退く勢あり
 我々と捨死するに決りけりふ初しも也と云々彼末石孫右郎
 右首級を以て自ら受けし八郎と云々勇猛の兵福徳が後二王に
 て眼を怒し進める勢あり切捨んと何うを白眼で扱ふ其勢
 勢や恐る人歎勢あり進める勢あり其勢ありと云々中ら
 引いて退きし



真田記二巻卷之十終

